

保育評価のストラテジー

評価ツールの活用・ 展開とオリジナリティの発揮

前田武司(金沢市・額小鳩保育園)

小尾麻希子(明石市立大観幼稚園)

保坂佳一(CHS子育て文化研究所)

埋橋玲子(同志社女子大学)

はじめに；保育環境評価スケール・国際ワークショップに参加して

- リサーチ・ベース = エビデンド・ベースの強い流れ
- 最も大きなプロジェクト
イギリスでのEPPE(就学前教育の効果的な実践)
- アメリカでの数々のプロジェクト
- 他カナダ、フランス、ドイツ、ポルトガル
- 政策展開への貢献

- くりかえし聞かれる質問 「なぜ日本では30人もの子どもを一人の担任でみながら、学業成績がいいのか？」
- 日本の保育 = 集団を育てる
- 保育者の資質の高さ
 - 環境評価スケールをもとにオリジナリティ
- これらを育んできた日本の保育制度
 - 3～6年間じっくりと子どもを育てる
- 急速にアメリカ・イギリス化していこうとする危うさ
- 「保育のしていること」を「保育のわからない人」に伝えていかなくてはならない。

“星の王子様”を守

保育

ガラパゴス

- 「大事なことは目に見えない」→ 見えない？
- 「枠を設けるとそれにとらわれてしまい、遊びの豊かさが損なわれる」？
- 「科学化」をはばみ、分野外の人からの共感を得ていない
- 枠組みをもち、数値化し、データを蓄積することの大切さ
→ 政策への貢献

数字にできることは数字にし、「大事なこと」を守っていかなくてはならない。省力化も大切。

ストラテジー(方略)